古今奇談 莠句冊　　全五巻、九篇　　近路行者著

天明三年菊、天明六年刊

小野の阿津磨踊戯に譬へて筆法を説く話

草體の假名國字となりて行るゝや。其便宜なること國の寶なるべし。往古遣使に具して物學びに唐土に入りたるを。教へに行しと我勝る言ふまれど。此大國の彼土より勝れる事小事をいて論すべからず。弘法大師生質の能書にて。彼土に筆法を得たまつるは強更な

り。世と三跡と並べ称するハ。皆絶倫の藝なるゆ。別て道風ゆ。能書の人ゆ。たゞ。中比ゆ小野と名のる人おゆ。いづれ徳ある人の氏族ゆ。血脈のゆゑはあらじ。筆の道好める人の行らきし事あり。むゆ繁栄の地ゆ山野静真として能書あり道風の正ゆ筆道を悟り。草體の妙ゆ。一揮三五宮神勢を失はず。又漢土官府署寺の書法を伝授ゆ。是を家の法則とす。近ごろ古今の能書に数へ入べゆは。権少人をゆゑと評

するゆ虚誉ゆはあらざるゆし。それゆ第子に丘下阿津麿ゆて女筆あり。性得筆勢の器あり。教を執て絶妙にいゆる。女流是を師ゆして学ふ。人柄ゆく心聰く。其人の量に應じて譬ゆを以て道ゆくゆゑゆ。習ふ人進みやすく。其門に市ゆなゆ。常に所ゆにさゆして云。却ゆれ若き折ゆ此道の妙をいゆすり。三島の社に参籠ゆ。通夜の夢に。白日と思ふ冥くなり。雲間に現ろゆき蛇龍動き。屈曲して充体其勢ひ定形なゆく。其状眼ゆの迷ることあらはゆず。已

にして晴〻しの。髮辺法ひたる神人出来りて。
筆の道得〻るやと問ふ。夢心に教へて云。只
畏怖て見定め得ずと答つれば。神人云左あら
んことゝ。甚うごくや。頭もかくすがかるかと
見れば尾にうねりの。伸る屈るの暫し息ことな
く。取定めがたき活物の妙處工夫をせよと。
おのれ時に思ふに。彼偶就を乗する者はよく
會得して今見〻る物ひとをあせり。形容定ふざ
るを穿さすれば。初に法を立て學び。後に其
法に囚められぬ時は。成就すべきや。今其法

を得せしめたまへと拜し乞ふ。時に神人袂よ
り大の鏹一片を取出して。是を見よ根は平に
して頭丸きに似て積土の形影あり。是を三稜
なるものに心えさするが法なり。漢の茶窓楷
正の字を工夫して。石室うて異人に授りたる
と托せしも。素悟は方正なれば。斜角
物なれば筆を下すの法よ云る。是等を倣い。
後世よ巧者の人擬造して。規矩の三折を借り。
囲き正中より三稜を想を入れて三つよ断し。内
の斜角を指さの法とし。外の三鈎の一鈎を取

て筆法となす。是即ち上代の假名法と落葉と
て蓮の花瓣の数て。其窩と反なるさま新月の
やくなる。是も我つも連り続け。法として古
人の字形を習ふ。古源は皆同じかるべし。形
似をまなぶまは。古朝の似たるを三跡の更なり。
兼好法師尊国主の心ゆくまゝに書くるる筆法。
山寺に行成なる物ハ。いとをひ殊に似るとも
及ばぬ所おほしんめり。文字ゑとめ蠻夷も清
べき事疑ひなし。かく云我は係ら怨なる章魂
の神筑と羅かりくるそと云まれてかりの限り

此言は志きず。好ける人こそ典じし知いし去
たまはんと。筆ま鄭云ぜり。其門ま業を受る
女師。多く小野姓を許れ。聰と呼ひ通と字
り。遊君の野風は雅名なるめま。まるどゝく
書けばこそ。又一流の教へあり。もべてに
字形美ま偏ま筆勢脱け。醜ま偏ま観を少
く。一字に内ま美醜ありとりふも辺を醜ま
旁を美ますすしかるべし。美醜を互る事りせ
て筆法ま長じ字をなす。美は易くして勢成失
ひやすく。醜はかくくしてよく氣象を養

ふ。一字い義ヨ。一字は礁ヨ交へ出すわと心
え遣ひうもあり。色いまけへの侍名いま艦
地函字ヨて。虎假名り對して丸かるとしふ。
草の内北ヨて。草艦を心えざれは字形ヨ杜
撰あり。字形をなるて字の鄭ヨはバ義とい
うべうう。文勢の活動は。此以部節ヨ踊り
さらヨ戯を行はし。「是を草艦の態ヨ譬ふべ
し。四楽より起りて森の暑とりへど。恐くは
森の温鶴ヨ入てし。嬌くして常ヨ言ずしゆえ
ぬ閑象が。我を吾ヨて邪とさけび。いまだ字

も習いめが右りかりい文字を踏ミ。百軍の高
篇手卿芸しず参差ヨ。身い三ッわくミ
手は一ヨせたヨめて。腰を斜ヨ振り。双脚を
外ヨ強出す。せうかヨ時ヨ程柏子を失
はヨる四点。野なれど藝ヨ目すべし。それ
も一場一周匝の短句ヨり。栗田杉坂も越べき
長篇ヨり。先ッ幅紙の廣狭ヨ主べきヨの大数
を經営て。其一場の踊り此緩急に視合せ。筆
を執たる間精氣を張て地べず。精氣四るまず
ヨ好い。間ヨ一度二度衆態の拍ヨ差ひて

足脱をべし。特に衰ひ老ぶる堪へがたし。左をさすりと思へば右を指し。右も又収らんと してゐ左り出づ。一画をはりて後又一画を出 せもうしてい。老軍も態として奉角しうれば。 世態いそすめば足随てすゝみ。又退けば柳 随て退くは辺旁もかちあり。文字の文あずにお りて。其の強弱人自ら選あり。ゑうも是の 流れぬそよき。其妙玄いうしては。踊り足 うして其人を高る。腰と態をはきは。娼伎と 流れて腹を失ふ。字も腰とりふゝと程のうか

ゝり。其も腰と人のうは書も與らぬ事なり。 左を見ずし右をとゝさすは大丈の類なり。四 合は若ずり柏子三ッとかく等を打を度とす。 形合の地は態玄優ゝ柳揚鉞り。三ッ四ッも河 に忙しき跡あり。左ゝ巻鼠し右ゝ巻鼠すい橋 心連火の字なり。ゝ文字を一ッとび拂ふら一度ふ り。拂いぬもまゝ同じ。文字は長き短きも。 体るゝ繁ゝゝも字ものゝ。三ッ四ッと拂ふ其 色をそゞつても。ゝゝを節度を合して勢を脱 さず。大娘剱器のたゝへも外るゝ。其をた

すの際は幾画さらはんや。又撃あり、人の己れ一刀着うとし。猶鋒を利々くに構て居まうでとゐふことあるべく。尚らずんは幾らひも斬へさぶりて。剣鋒を芝ぶに振ずず。茶理を敬ぶ人の。極き茶七を重きが如く見るに同し。重画そして字の数多くとも。其始の右を指し左仮指の所へ立ちがりて。是踏なわすぶ。あくしては字体退きしく。芝ぶは迂闊すれば。足る書こる字形を勢を定めらずして。立かゝることあり。それ方を巻

帖條幅。屏障長文まいるまては。自我と序破急は躰出来りて。中程りは相よも約束も取はつす程の所ゆゝ。ゆわば。そく相應の墨色も生ぜず。発興ことあし。是ちかし能主の事ゝて。踊りも如の水如き四合姫はかく知やきゝはあるべ。又連綿さやと。枝ゝ鎖むちがきゝ。物ぐゝりやし此好くぶ字体に成ては。筆体の甲斐あくこそ。ほそくは書得すぎ筆ゝてかそく書たるぐ美じとあれば。太くは書得すぎ筆にてかゝるはそよらん。

そのすりをありてよく走りしるい。うはへも
華消て見ゆるし。今ひとたびうり並べて見し
ば。動て出るいあり。華は運ぶた華とりふも
のありて。本形は離れて。華うは續きる所
あり。彼奪頭は屈伸まも緣ゆるあるちあり
んと。大氏示すこと越あり。心を用るとと
そ見るものかたの。斯て三ツき時うを行れけ
るゞ。年し積りけるば。應對も厭いしく今は
故郷に帰りて心まゝに生を遂んと。多は門弟
るに辞別をあり。雜具を知る人にゆづりあり

へ。餞別の贈り物を充ゝそはいを携へて。
居住を辞し。婢僕彼是随へて發足しける。逐
江ある日野の產ありば。道中にて美濃と近江
へ岐べき太郎次郎とふ騾にいるり。志ばし
く午睡せんとて扉風しつらひて臥うり。孫の
ふ時うつりけるば。使女呼さまゝと扉の
外より。何心なく見るに。酣鼾の音高く心
へきて。寢るる姿常ならず。身動きは大りて
恐ろしきまゝ皆私者を呼て是を告げ。極しく
私そめくほどた。阿津磨目をさまし。やゞて

素足にて後に出。其あたりなる竹藪の中に入り
新し見けしらり。藪の内を探きと目まんる和
かし。其日暮れぬ。帰り来らねば。指てゆく
日野とやらん。時迄きさてのけふもあるを
ど。しるべ此あるも由緒の人もあるしのかしば
をすを何をうら詠へ。其旅装に貯の財宝は
遠く送りし搭者此料に配分して離散しけるを
なりの丘に首をるの布を失げす。かこく
も布形を提せぞんば。長る婢僕等人の疑を蒙
らん。其言ふるや睫を模て怠惰を容ることな

かれ。其物ふるや尾を露て不打を求るあるん

本書目録

一 八方此丘尼人魚を放生して寿を養ふ話
二 小野の住慶頃戯の壁て草法を授る話
三 水家俗説の異同家神の霊問答此話
四 玉梅を人雑談して回転を度ふる話
五 絶間池の濫義弥頭此雷衣子の智ありし話
六 去野猩と人間り逢て歌妹を作る話
七 大高何某義を屠て新の石を賊を射る話

八　猥褻（わいせつ）な人形を離し五度の言を識る話

九　白竹の箱遠く奉て大き怒跡する話

以上九篇

十ノ廿　松屋製